



CIVIC FORCE

NEWS LETTER Vol.12

ニュースレター (July, 2017)



大量の土砂や流木が家や田畑にたれ込み、行方不明者の捜索が困難を極めた九州北部豪雨。今も避難生活を続ける人を支えるため、今後は土砂や瓦礫の撤去作業、田畑の修復作業などを担うボランティアが求められています。



Contents

P2 被災地を支援する

【九州北部豪雨】

- ・緊急支援活動を振り返る
- ・日田市で「NPO パートナー協働事業」開始
- ・ご寄付のお礼

【東日本大震災】

- ・「夢を応援プロジェクト」卒業生の声

【熊本地震】

- ・「NPO パートナー協働事業」今夏、観光復興ボランティアツアーを開催！

P7 緊急即応体制を創る

- ・広島でレスキュー訓練ほか

発行日：2017年7月

発行：公益社団法人 Civic Force
〒151-0063 東京都渋谷区富ヶ谷 2-41-12
富ヶ谷小川ビル 2階

TEL：03-5790-9366

e-mail：info@civic-force.org

URL：http://www.civic-force.org

大量の土砂や流木がはばむ復旧の道

地鳴りとともに崩れ堕ちた山肌、大量の流木が積み上がる道路、水没した田畑や住宅・・・2017年7月5日未明から降り続いた大雨の影響で、福岡・大分両県で死者35人、行方不明者6人（2017年7月末時点）に及ぶ甚大な被害が発生しました。

住宅の被害は両県で673棟にのぼり、2017年7月末現在も約650人が体育館や公民館などの避難所に身を寄せています。特に大きな被害を受けた福岡県朝倉市と東峰村では、8月後半には仮設住宅が完成する予定ですが、道路の復旧工事などは依然進まず、被害のあった地域で暮らす人々は不便な生活を強いられています。

発災直後に緊急支援チームを結成した Civic Force は、6日早朝から水陸両用車や車両、ヘリなどで被災地に向かい、行方不明者の捜索活動を実施しました。同時に、被災地の災害対策本部や避難所をまわってニーズ調査を行い、提携する企業と協力して下着や衛生用品、暑さ対策のための扇風機などを配布。7月中旬からは、大分県日田市の避難所運営をサポートする被災地 NGO 協働センターと協力し、泥かきや清掃などを担うボランティアの受け入れ調整などを続けています。

今月のニュースレターでは、甚大な被害を受けた九州豪雨の被災地支援活動についてご報告します。また、東日本大震災で被災した学生を応援する「夢を応援プロジェクト」の奨学生や卒業生から寄せられた作文の一部をご紹介しますほか、今夏、熊本地震の被害を受けた地域で実施する「NPO パートナー協働事業」の観光復興ボランティアツアーの計画などについてお伝えします。

被災地 を 支援する

日本各地で発生する災害時の緊急支援活動や被災地の復旧・復興に向けた取り組みなどについてお知らせします。

九州 北部 豪雨

緊急支援活動を振り返る

7月5日未明から九州北部を襲った記録的な大雨の影響で、行方不明者が多数出ていることなどを受け、Civic Force は姉妹団体に佐賀に拠点を置くアジアパシフィックアライアンス・ジャパン（A-PAD ジャパン）と、災害救助犬の育成に力を入れるピースウィンズ・ジャパン（PWJ）とともにレスキューチームを立ち上げ、被災地へ向かいました。出勤から今日までの動きをまとめました。

豪雨 発生

7/5～6

福岡県と大分県のほぼ全域で大雨特別警報、
情報収集開始



7/6 早朝～ レスキューチーム出動

災害救助犬 2 頭とレスキュー隊員 8 人が水陸両用車などで広島から被災地へ出動。上空から被災地の状況を確認し救助にあたるため、天候回復後にヘリでも出動。



ヘリから撮影した朝倉市の被害（左）

7/6～11 救助犬による行方不明者の捜索

特に被害が大きかった福岡県朝倉市の災害対策本部などから情報を収集し、同市杷木松末（はきますえ）の中村集落などで、行方不明者の家族や自衛隊、消防、警察などと協力して捜索。



7/6～

ニーズ調査と物資の調達・配布

発災直後に開始したニーズ調査の結果に基づき、福岡県の朝倉市と東峰村、大分県日田市の合わせて 13 の避難所で緊急支援物資を配りました。物資の調達にあたっては、平時から協力関係にあるグンゼなど複数の企業と協力しました。



NPO パートナーとの協働事業

p3 参照

物資の配布先

(朝倉市杷木地区)
らくゆう館
フレアス甘木
杷木中学校
杷木支所
杷木市サンライズ杷木
久喜宮小学校

(東峰村)
東峰村南部避難所
東峰村上福井公民館
東峰村保健福祉センターいずみ館
東峰村北部避難所（喜楽来館）
宝珠の郷
東峰村ボランティアセンター
(日田市) 大鶴公民館

支援物資

- 衣類（下着 3200 枚、靴下約 1200 枚、タオル 600 枚）
- 衛生用品（首巻き保冷剤、冷却シート、湿布、消毒液、絆創膏、洗剤、石鹼、ティッシュ、ビニール手袋など）
- 食料（弁当 170 個、果物 200kg、水、栄養ドリンク、ビタミン剤、調味料など）
- 家電（スポットクーラー、除湿機、扇風機、延長コードなど）
- ボランティア用設備（チェーンソー、車両など）等

日田市で「NPO パートナー協働事業」開始

被災した地域の復旧・復興をサポートするため、Civic Force は被災地 NGO 協働センターとの「NPO パートナー協働事業」を通じて、大分県日田市のボランティアセンターの運営をサポートしています。2011 年の東日本大震災をきっかけに生まれた「NPO パートナー協働事業」の仕組みを、九州北部豪雨の被災地でも役立てています。

自治体支援

被災地 NGO 協働センター



被災者のニーズ調査やボランティアの受け入れ調整など復旧に向けて課題が山積する被災地の自治体をサポートするため、被災地 NGO 協働センターとの協働事業を通じて、日田市災害ボランティアセンターの運営支援を行っています。

被災地 NGO 協働センターは、阪神・淡路大震災以降、国内の災害で中長期的な復興を見据えた支援を続けてきた実績があり、同センターの頼政良太さんは「当面の活動は泥かきのボランティアなどが中心」と話しています。

【九州豪雨】ご寄付のお礼

九州の豪雨被害に対し、発災直後から皆様にお寄せいただいたご支援は、2017 年 7 月末時点で、約 290 万円となります（速報値）。迅速かつ多大なるご支援に感謝申し上げます。皆様からのご寄付は、被災された方々への支援活動に活用させていただきます。なお、九州豪雨支援活動へのご寄付受付は 7 月末までです。

避難者の方々の声

「3 日ぶりの着替えが嬉しい」
— 支援物資の肌着を受け取った子ども

「涼しくて快適。
今夜はやっとゆっくり眠れそう」
— 東峰村の公民館で
スポットクーラーを利用する女性

「洗濯物が乾かせる！」
— 除湿機を届けた避難所の男性



「可能性を広げてくれた基金に感謝」 ～「夢を応援プロジェクト」卒業生からのメッセージ



東日本大震災で被災した岩手・宮城・福島 3 県の学生をサポートする「夢を応援プロジェクト」。2011 年 9 月から 1 人あたり月額 3 万円の奨学金を支給しています。このたび、2017 年 3 月をもって奨学金の受給を終了した卒業生からメッセージが届きましたので、その一部をご紹介します。彼らの多くは、苦しい時期を乗り越え、春から社会人や大学院生などとして新たな一歩を踏み出しています。（編集の都合上、文章の一部は割愛・編集しています。年齢は 2017 年 4 月現在）

「管理栄養士として病院で働いています」

—福島県出身／女性／22 歳

津波で家をなくし、3 人兄弟の長女だった私は、高校卒業後、就職して働こうと考えていました。でも両親に「大学でやりたいことをしなさい」と後押ししてもらい大学へ進学。この春からは管理栄養士として宮城県の病院に就職できました。

将来の夢に向けた一歩を踏み出せたのは、支えてくれた家族や夢を応援プロジェクトの皆さんのおかげです。



「可能性を広げてくれた基金に感謝」

—福島県出身／男性／22 歳

高校生のころに東日本大震災を経験し、被災地の復興や社会基盤の整備に関心を持つようになりました。被災した直後は、経済的な面から大学進学をあきらめ就職も考えましたが、夢を応援基金のおかげで大学へ進学でき、建設関係の道に進むことを決めました。現在大学院に進み目標に向かってさらに頑張っています。

「後輩たちの夢を応援できる大人に」

—宮城県出身／女性／22 歳

3 月に大学を卒業し、4 月から障がい者支援の事業所で働いています。大学では幼稚園教諭、保育士、社会福祉士の資格を取り、現在、社会福祉士の合格発表を待っているところです。資格を生かして働き、今後は夢を応援基金の募金箱に少しずつ恩返しをしながら、後輩たちの夢を応援できる大人になりたいです。

「憧れの グランド スタッフに」

—宮城県出身／女性／22 歳



6 年前の震災直後、まさか大学に行けるとは思いもしませんでした。でも皆さまのご支援のおかげで 4 年間大学に通うことができ、春から憧れだったグランドスタッフとして成田国際空港で働いています。仕事に励み、社会に貢献していくことで、応援してくれた皆さんに少しでも恩返しできればと思います。

「助産師として同じ経験した母子を支えたい」

—岩手県出身／女性／22 歳

大学で助産師の資格をとり、この春から宮城県の病院で働いています。大学 4 年間は、勉強と実習だらけの必死の毎日でしたが、親の気持ちや母子の絆を学びました。死別した親のことを考える辛い時間でもありましたが、同じような体験をした母子にかかわれるこの夢を選択し、この職につけたことを誇りに思います。



「忘れられない“安堵感”」

—宮城県出身／男性／22 歳

高校 1 年生のときに被災し、「この先どうなるのか」と不安でたまりませんでした。そんななか、当時の担任の先生から夢を応援基金を紹介され、将来への道筋がつかめました。あの日の安堵感は今でも鮮明に覚えています。春からは地元の金融機関で働いていますが、今の私があるのは高校・大学と充実した学生生活を過ごすことができたおかげです。



奨学生たちが 「今、伝えたいこと」

「夢を応援プロジェクト」では、奨学生たちに「この1年で学んだこと」「チャレンジしたいこと」「6年を振り返って思うこと」「今、伝えたいこと」などのテーマで今年も作文を書いてもらいました。その一部をご紹介します。（編集の都合上、文章の一部は割愛・編集しています。学年は2017年4月現在）

「インターン経験が将来の目標につながった」

大学4年／宮城県出身・在住

消極的な自分を変えたいという思いから、今年3月から企業のインターンシップに参加しました。最初の3カ月ほどはウェブプログラミングの基礎を学び、その後システム開発にかかりました。初めての経験で不安でしたが、グループ活動でリーダーに抜擢され、年上の先輩と協力しました。開発したシステムは、私の通う大学職員の前でプレゼンし、改良を加えた上で実際に学校で使われることになりました。将来はプロのウェブプログラマーになれるよう努力していきます。

「被災した私にしかできないことを」

大学4年／岩手県出身・京都府在住

大学で地元を離れ京都で一人暮らしをしています。6年前の震災はまわりの人にとっては他人事で、悪気はないとわかっていても孤独を感じることがあります。そんななか、2016年11月に中国で開かれた「アジア災害トラウマ研究会」に参加し、災害について改めて考える機会になりました。今年の学会では、被災体験を中国の同世代の方に発表する機会をいただけそうです。被災した私たちにしかできないことをやり遂げたいです。

「先人の警告と被災の経験、風化させない」

大学3年／岩手県出身・神奈川県在住

震災から6年が経ち、当時中学2年だった私は大学3年生になりました。震災から得た教訓は、震災を風化させないこと。岩手県宮古市には海拔約60mの山腹に大津波記念碑が200基ほどあり、1896年と1933年の三陸地震で村民が全滅したため「これより下に家をつくってはならない」と警告しています。でも先人の警告は徐々に風化し、東日本大震災では多数の命が失われました。「想定外の大津波だった」という言葉をよく耳にしますが、日本は地震大国であることを認識し、最悪の状況を考えておくことが大切です。

「被災者を“被害者”にしないでほしい」

大学4年／福島県出身・宮城県在住

家族や友人、家、笑顔・・・6年前のあの日、多くのものを失いました。当時の僕は何もできずにただ無力でした。でも当時子どもだった僕は、「復興」を合言葉に強く明るく立ち上がる大人たちを見て育ち、「僕も負けていけない」と大きな夢もできました。昨年の熊本地震では、私たちの被災経験を生かして他の被災地を助けることも東北の復興につながると感じるようにもなりました。でも原発事故の避難者に対するいじめや風評被害の報道を見ると、むしろ“復興”は被災地の外ではまだ先なのかもしれません。今、私が伝えたいのは、被災者を被害者にしないでほしいということです。

「目の前のチャンスに挑み続けたい」

短期大学2年／宮城県出身・アメリカ在住

2015年夏からアメリカの短期大学に通い、今夏の卒業後、4年制大学に編入します。アメリカでは、今までの学生生活のなかで一番勉強したのではないかと思うほど机に向かい、それまでの勉強不足を後悔しています。編入後の新しい学校では、ボランティアやクラブ活動、アメリカならではの異文化交流の機会に積極的に参加し、今までにない自分を見つけたいです。留学生活を通じてチャンスをつかむには意欲だけでなく、経験や知識を増やすことも大切と知りました。今、目の前にある機会に積極的にチャレンジし、自分の可能性を広げていきたいです。



「町の復興に尽くす医者になりたい」

大学4年／福島県出身・在住

生まれ故郷である富岡町の避難指示が、2017年4月に解除されました。でも全町民の6割は「今後帰ることはない」とアンケートで答えています。帰宅する上でネックになるのは病院やお年寄りの移動手段の確保。近くに診療所があっても夜間に急患を受け付けられません。このようななか、富岡町には単身赴任で帰還して町民の診療にあたる医師がいます。また、双葉郡広野町の高野病院には、昨年冬に亡くなるまで医師として働き続けた高野医師がいます。このように、愛着のある町で住民に寄り添いながら町の復興に全力を尽くす医師になりたいです。



図書寄贈プログラム 奨学生の読書感想文を紹介

「夢を応援プロジェクト」の奨学生を対象に実施した図書寄贈プログラムでは、26人に26冊を寄贈しました。読書感想文の一部をHPで紹介しています。 <http://www.civic-force.org/emergency/higashinohon/choki/children/>

今夏、観光復興ボランティアツアーを実施

熊本地震の被害を受けた地域の復旧・復興をサポートするため、2016年6月に開始した熊本版「NPO パートナー協働事業」では、現在4件のプロジェクトを実施中。今夏には、韓国と東北の学生が熊本の観光復興に携わるボランティアツアーのプログラムを予定しています。

NEW

A-PAD KOREA

韓国の若者が熊本の魅力を発信！



阿蘇山をはじめとする雄大な景色が美しい熊本は、外国人にも人気の観光地ですが、地震の影響で観光経済に打撃を与えています。Civic Force のパートナー協働事業では、韓国の防災ネットワーク組織「A-PAD KOREA」と協力し、今夏、韓国の若者が熊本からその魅力を発信する観光復興ボランティアツアーを実施します。

プロジェクトでは、韓国国内で被災地復興にかかわる上での教育や観光資源を発掘するための事前調査などを実施。被災した地域の人々との交流を通じて、有名な観光スポットだけでなく、海外に知られていない地域の魅力を発掘して動画や写真を活用して SNS などで発信します。ツアーには、東北で被災した地域の学生も参加し、復興に向けた議論の場や国際交流の機会も提供する予定です。

Reborn ネットワーク

「みんなで話すことが大切」—復興大座談会を開催

住宅の全半壊が1000棟を超え、集団移転や地域再建に向けた話し合いをサポートする西原村 Reborn ネットワークは、5月20日、西原村構造改善センターで「復興大座談会」を開催。集まった村民や支援関係者約100人が、各集落や仮設住宅での暮らしの現状や課題などについて発表しました。仮設住宅で暮らす参加者からは「別の地区の取り組みがわかった。不安や孤独を感じがちだが、いろんな人と話して情報を共有することが復興に向けて一番大事」と話していました。



Arts and Sports for everyone (ASE)

“ボッチャ” 交流会に200人が参加

ASE は、6月25日、益城町広安小学校でユニバーサルスポーツ「ボッチャ」の交流会を開催し、熊本県内外の特別支援学校の生徒・保護者、仮設住宅の住民など約200人が参加しました。代表の吉田さんは「たくさんのつながりができた。今回の企画を振り返り、11月に開催する障がい者スポーツフォーラムの運営に生かしたい」と話しています。また、ASEは6月に一般社団法人の法人格を取得し、活動の幅を広げています。



LGBT-JAPAN 熊本市内で講演会を開催

熊本地震の被害にあった LGBT※の悩みや課題を発掘し、次の災害に備えるための調査を続ける LGBT JAPAN は、7月8日、熊本市市民活動支援センターあいぽーとで「被災地にも存在する LGBTQ※」をテーマに講演会を開催しまし

た。集まった約20人が災害時のトイレ問題の対応などについて話し合いました。また、被災地で活動する支援団体が8月に設置予定の「ボランティアステーション」の設立会議に参加しました。

※LGBTQ : Lesbian, Gay, Bisexual, Transgender, Queerioning

緊急 即応体制 を創る

大規模災害時の緊急即応体制を整えるためのさまざまな取り組みを行っています。メディア掲載やご協力いただいている皆様の関連情報もお知らせします。

緊急即 応体制

海外チームと合同訓練

アジア太平洋地域で災害が起きたとき、一刻も早く一人でも多くの命を救うため、Civic Force を含む合同レスキューチーム（A-PAD ジャパン /Peace Winds Japan）は日々救助訓練に励んでいます。毎月の定期訓練では広島県東部に位置する神石高原町を拠点に屋内外でロープクライミングの集中訓練などを行っており、8月中旬には日本と台湾、香港のレスキューチームとの合同訓練を予定しています。



緊急即 応体制

1日1回 1クリックするだけ

1日1回1クリックするだけで社会貢献につながります。

■「gooddo（グッドウ）」
<http://bit.ly/17Xr7N3>

■PSC クリック募金
・東北支援
<http://www.psc-inc.co.jp/clickdonation/index.html>

メディア

ラジオ「J-WAVE」に出演

7月17日 21:45～、ラジオ「J-WAVE」の番組「JAM THE WORLD」で、九州豪雨の被災地支援活動にあたっているレスキューチームの新城卓がインタビューを受けました。

緊急即 応体制

1日33円から できることがあります

次の大規模災害に向け、平時から備えておくために、皆様の力が必要です。マンスリーサポーターとして、毎月定額（1000円単位）をご寄付いただく形で、大規模災害にともに備えてください。

■銀行：三井住友銀行 青山支店 普通 6953964

■ゆうちょ：00140-6-361805

（上記いずれも口座名義は「コウエキシャダンホウジン シェックフォース」です）

■クレジットカード：HP「オンライン募金」をクリックしてください。

https://bokinchan2.com/civicforce/donation/bokin/page1.php?bokin_type=donation

※マンスリー・レポートおよびニュースレターのバックナンバーは、

<http://civic-force.org/news/monthly/> からご覧いただけます。





CIVIC FORCE